

417 CO₂ laser conization 後の修復に関する研究
—免疫組織学的検討—

島根医大

都 仁哉, 岩成 治, 伊達美江, 森山政司,
木島 聡, 飯田幸司, 北尾 学

[目的] CO₂ laser conization 後の子宮頸部の修復過程を知る目的で, 子宮摘出標本を用いて, HE 染色と抗ケラチンモノクローナル抗体を用いて免疫組織化学的に検討した。

[方法] 研究対象は, 当科で CO₂ laser conization 施行後に子宮を摘出した 38 例(平均年齢 48 ± 8 歳)で, conization 施行後子宮摘出までの期間によって 7 グループ(1 週後: 4 例, 2 週後: 4 例, 3 週後: 7 例, 4 週後: 9 例, 5 週後: 6 例, 6 週後: 5 例, 8 週以後: 3 例)に分け検討した。HE 染色による組織学的検索後, 抗ケラチンモノクローナル抗体を用いて免疫組織化学的に検討した。

[成績] PKK-1, KL-1 は表面を被う 1 層の修復細胞に対し共に陽性を示した。修復細胞の分化, 多層化に伴い PKK-1 は基底部, KL-1 は表層部に局在を示した。この性質を利用し修復の開始, 完了について検討した。1 週後の 4 例中 2 例に endocervix 側に修復細胞を認めた。2 週後は 4 例中 3 例に endocervix および exocervix の両側に修復細胞を認め, 他の 1 例は endocervix 側のみ修復細胞を認めた。修復が完成し, PKK-1, KL-1 の局在を認めたのは 4 週後で, 9 例中 6 例において修復細胞が全面を被い, その 6 例中 4 例に S-Cj を認め, PKK-1, KL-1 の局在を認めた。年齢の修復速度への影響を検討してみると, 4 週後以後の例, 23 例中閉経前の 14 例(4 週後: 6 例, 5 週後: 3 例, 6 週後: 3 例, 8 週以後: 2 例)は全て修復は完了していた。閉経後では 9 例中 2 例(5 週後, 6 週後)のみであった。

[結論] 修復細胞は PKK-1, KL-1 に陽性を示す上皮細胞であった。修復の開始は 1 週, 完了は閉経前例では 4 週で, 閉経後は遅延する傾向があった。

418 子宮内膜症と自己抗体 — とくに抗リン脂質抗体について

鹿児島大

竹迫俊二, 藤野敏則, 岩元一朗, 飯尾一登,
永田行博

[目的] 子宮内膜症, 特に初期子宮内膜症の不妊原因は未だ明確ではない。免疫学的機序による着床後の胎芽死亡も想定されうる。そこで我々は不妊原因を追求するために, 自己免疫学的機序から胎盤血栓との関連性が示唆されている抗リン脂質抗体の有無を子宮内膜症婦人で検討した。また, 活性部分トロンボプラスチン時間(APTT), 抗核抗体および抗 DNA 抗体も測定した。[方法] 子宮内膜症婦人 12 名を対象として, 血清中の cardiolipin(CL), phosphatidylglycerol(PG), phosphatidylserine(PS), phosphatidylinositol(PI), phosphatidic acid(PA) に対する抗体(IgG および IgM) を特異的な ELISA 法を用いて測定した。また, 一部の症例では腹水中のそれらも測定した。ELISA 法の判定は, 健常婦人 20 名の平均値 + 2 SD 以上のものを陽性とした。陽性対照は Lupus anticoagulant 陽性の SLE 患者の血清を用いた。[成績] 子宮内膜症患者 12 例中, その血清中に CL, PG, PS, PI, PA のうち少なくとも 1 つ以上に対する抗体保有例は, IgG で 5 例, IgM で 2 例であった。個々のリン脂質では, CL, PG, PS, PI, PA すべてそれぞれ 2 症例において抗体陽性であった。症例別では, 異なる抗リン脂質抗体保有パターンがみられた。また, 血清中抗 CL IgG 抗体陽性例で, その腹水中に抗 CL IgM 抗体が認められた。APTT 異常例, 抗 DNA 抗体保有例はなかったが, 抗核抗体陽性は 3 例にみられた。[結論] 子宮内膜症では抗リン脂質抗体および抗核抗体が高頻度にみられ, 自己免疫学的機序の関与が強く示唆された。このことが不妊原因に関与している可能性がある。